

旅のプレゼント



茶の間でテレビを観ている私の視界の隅を何やら見慣れない物が通りすぎた。裏口から入って来るのは殆ど車なのだが、ハタハタと音を立ててモスグリーンのシャツの人を乗せた物が植え込みの影を行く。玄関に回って見ると、軍慰会の会長のKさんだった。

「もう視界が限られて、車に乗ってはダメというから、今はこれですよ」

見ると電動四輪車である。会長は八十歳を過ぎても眼鏡なしで物を読むし、ワープロなど自在にこなすスーパー老人だったが、この正月脳梗塞で倒れ、再起不能とも聞いていたので、年老いた白馬童子のように現れたのには本当に驚いた。何と

いう回復力なのか。何回となく死線を越えて生き延びて来た抜群の精神力の持主なればこそであるう。

会長は茶の間に入ると鞆から「宮崎県研修旅行について」という一枚の紙を取り出した彼は毎年気候のよい旧「海軍記念日」（五月二十八日）の頃に小旅行の企画を立てては会員と出掛けるのを楽しみにしていた。声を掛けて下さるので、夫は佐世保や鹿屋基地など二三回参加している。

昨年の暮に「来年は宮崎に行きましよう」と言った。かつて私が行きたいと言っていた飢肥も入れているというので、二人で申し込んであった。

「少し遅れましたが実行します」

という。六月十八日に南郷町に一泊、都井岬や飢肥を巡るといふ。彼は南郷町の海中公園を見せたがっているのだが、脳梗塞を病んで半年、本当に大丈夫なのだろうか。

朝十時にマイクロバスが迎えに来るといふので、九時頃役場でコピーをとっていると、夫が「もう迎えに来ている」と知らせに来た定刻のないのが

老人との旅なのだ。

バスの中は会長夫妻の他に七十歳を越した女性ばかり七人。会員だった夫に先立たれた方々である。丁度田植えの時期だったこともあるが、元軍人たちは体力に限界を感じる年頃なのかもしれない。

町外れ近くで八十歳くらいの男性が加わった。元陸軍兵士のNさんである。日焼けした顔は温和で静かに前の席に座る。

バスは国分を抜けて志布志に向かった。時折青空が顔を出す、まずまずの空模様であった。外見が少し痩せたくらいかと思っていた会長はやはり以前とは少し違つ。お弁当を買つて積んであるのだが何処で食べるのか決まらない。奥さんが「何処で食べるの」と聞いてもはつきりしない。

「もうこんなことが多くて。あまり言つと怒るからハラハラしているばかりよ」

奥さんが小声でぼやく。初めて会長の日常が思いやられた。記憶が定かでなくなり気短になった会長を、奥さんが優しく気づかして変わらぬよう

に振る舞っているのだ。

結局志布志の先の海水浴場にバスを止め、その中でお弁当を食べることになった。Nさんは一人お弁当をぶらさげてバスを出た。

やがて戻つて来た彼はポツツリと言った。「僕は肝臓ガンなんですよ。弁当はあまり食べられないが、これが見納めと思つてね。ゆっくり海を眺めて来ました」

その淡々とした穏やかな口調に、私は彼が事実を告げていることを感じ取った。

「明日は大雨つて言つてましたよ。都井岬は今日行つておきましょうよ」

私はそのまま南郷町の宿に直行するよりは明日の日程を少しでもこなしておいた方がいいと提案して、都井岬に向かった。空は重い梅雨空になっていた。

岬の先端に着いたが、何人かはもう何回も来ていると言つて車外に出ようとしなない。私達と灯台に登つたのは四人だけだった。折角の三百度に開けた都井岬の灯台からの絶景も包むような霧の中

に消えていた。

南郷町の時代物の ホテルは、会長が以前に何回か利用した所だという。行き過ぎてバックしたりしたが、四時少し前には辿り着いた。それは港から一寸入った所にあつた。まだ海のシーズン前のこと、私達の他は泊まり客はいないようだった。

宴会は私と同年輩の女将さんが付ききりでカラオケや踊りもサーブスして盛り上げてくれた。料理は刺身が流石に新鮮で旨い。

「この男がね。の刺身がもう二度食べたいといつんでここへ来たんだよ」

と会長が女将に言う。なるほど、この場所の選ばれた理由の一つがこれだった。雑談の話題は何となく戦争に落ち着く。

「うちの父ちゃんは、よく『僕はあんたの子だつていのが現れるかもしれない』って言つてたもんだつた」

「従軍慰安婦もいたらしいよ。長生きしなかつたよつだよ」

Nさんが遠くを見つめて言った。

「明日の命はないとなつたら、もつ金や御馳走ではないさ。女だよ。女だけさ。慰安婦にはスーパーのレジの行列みたいだったさ」

彼は自分がここにいるのは奇跡だと言つた幾人の同僚の死を目にして来たのだろつ。

翌日の朝食に素晴らしい黒鯛と烏賊の刺身がたつぷり付いた。

「今朝とれたものなのよ」
優しい女将の心尽くしだった。Nさんも

「これで満足した。心残りはない」と言つた。

フロントから戻つた会長が残念そうに報告した。「海が濁つていて、海中公園は今日はやっていないそうです」

これがこの旅行の目玉の筈だった。

八時半にホテルを出発。会長は運転手に飢肥に行つて、時間は掛からなかつた。ここでも車外に出て飢肥城を見物する人は少なかつた。運転

手さんが初めて来たと言つて一緒に城門の下から眺めていたが、いつの間にか姿を消した。丁寧に復元され手入れも行き届いた庭園や城内を、夫と私は待つている人を気づかつて殆ど駆け足で巡つた。いつか子供や孫たちとゆつくり来ようと思ひながら。

次は鵜戸神宮ということで日南海岸沿いの道に戻つた。この春停年になつてこの職に就いたという運転手は、私達のワゴン車を大型バスの駐車場に止めた。鵜戸神宮はそこからは相当歩かねばならなかつた。例によつて車から降りてお参りしたのは僅か三人。気忙しくトンネル道を通り石段を下りて、海辺の洞窟の中にある本殿にお参りする。祭神は神武天皇の父「ウガヤフキアエズノミコト」の由、改めて南九州は古事記の世界だと実感する。そしてまた神話の時代からの祭礼がこの南の果てできちんと受け継がれ、行われていることに素朴な感動を覚えた。

それにしても急いでお参りしても往復一時間以上掛かつたのではないかと思う。その間大方の人

は車中で何をしていたのだろう。そもそも殆どの人ですでに訪れている土地を、そんなに安いとは言えない会費の旅行を計画して、それにまた参加する人もいるとは思議なことと思つた。

これはきつと会長の私達への無言のプレゼントなだと密かに思つ。勿論心不全があるので手術も出来ないという老会員にも、見納めの海や食べ納めの刺身を十分満喫させてやりたいとの旅のプレゼントである。

日南海岸から宮崎に出て高速に乗るのかと思つたら、車はまた飢肥へと向かつていた。都城に出てこの号線経由で帰ることにしたのだという。この辺のチグハグさもこの旅を象徴していて可笑しかった。

参加者の皆さんの善意に見守られてのこの小さな旅も、きつと忘れられないものになるだろう。つくづく私達夫婦に幸せを感じさせて戴いた旅であつた。

